

「ピロリ菌が陽性と 言われたら…」

ピロリ菌とはどんな菌
ですか。

長年、胃の中には胃酸があるために細菌はいないとされてきました。しかし30年ほど前に胃の中にピロリ菌が発見されました。ピロリ菌は、胃酸の中で生きるために自分の周囲の環境をアンモニア等に産生させる機能を有しています。その結果、胃粘膜に傷害を与えて様々な病気を引き起こします。

どのようにして感染する
のですか。

多くは子供の時で5歳頃までに感染するとされています。主に家族内で口からの経口感染と言われています。また両親や祖父母などから口移しで食事を与えたりすると感染します。感染後はほぼ一生の間、感染状態が続きます。

感染率は年代により異なっています。現在は50歳以上の人は80%以上が感染していると言わ

れています。しかし上下水道の完備など衛生環境の改善により、年齢が下がるに従って感染率は低下していて、10歳代では10から20%程度です。ただ感染が成立するとほぼ一生にわたって持続感染します。

ピロリ菌はどのような
病気と関連していますか。

胃潰瘍や十二指腸潰瘍の再発や胃癌の発癌とも関連性が指摘されています。またリンパ腫のひとつである胃マルトリンパ腫

や胃の過形成性ポリープの成因にもなります。また胃の不調を来す慢性胃炎や機能性ディスペシア（機能性胃腸症）の成因にもなっています。さらに胃だけではなく、特発性血小板減少性紫斑病や慢性蕁麻疹等、鉄欠乏性貧血等の全身の病気とも関連性があります。

ピロリ菌の感染はどの
ように診断しますか。

胃カメラの検査の時に、胃の一部を採取する生検を用いて、ウレアーゼ試験をしたり、病理診断や培養検査を行います。また血液検査や尿で抗体を測定したり、便による抗原検査、呼吸テストなどがあります。

ピロリ菌はどのよう
に退治する
ことができますか。

ピロリ菌は細菌です。退治することを除菌と言います。平成25年2月から健康保険の適応となりましたので、原則として胃

内視鏡検査を行って検査が陽性であれば全て保険適応です。まずプロトンポンプ阻害剤とペニシリンおよびクラリスロマイシンの2種類の抗菌剤を1週間、内服します。不成功の場合はペニシリンとメトロニダゾールの2種類を内服します。こうした一次除菌と二次除菌と併せてほぼ90%の人が除菌されます。

しかし除菌できても、胃癌の発生率は低下しますがゼロにはなりません。従いまして、除菌後に胃癌になったとしても早期胃癌の段階で発見されるため定期的な胃の検診が必要です。

除菌が成功したらもう感
染しませんか。また気を
つけることはありますか。

治療後はコイド型といって、一時的にピロリ菌の活性度が下がる状況になることもあります。言わば「死んだふり」をします。ですので、正しい除菌判定には2ヶ月以降が良いとされています。判定は呼吸テストが一番良いとされています。除菌成功後

は再感染はないとされています。また除菌成功後には胃がんの発生頻度は低下しますが、ゼロにはなりません。従いまして、除菌成功後も必ず定期的に胃カメラ検査を受けることをお勧めします。

今月の先生



岐阜市民病院 消化器内科
加藤則廣 先生

○専門分野
消化管疾患の診断と治療・内視鏡治療
○役職
診療局長(内科系)
第二内科部長
消化器内科部長
○主な資格・認定
日本消化器内視鏡学会指導医・専門医
日本消化器病学会指導医・専門医
日本内科学会指導医・認定医
日本肝臓学会専門医
日本消化管学会専門医

日本臨床腫瘍学会暫定指導医
日本感染症学会ICD
(インフェクション・コントロール・ドクター)
日本医師会認定産業医
労働衛生コンサルタント
○卒業年、主な職歴
昭和56年岐阜大学医学部卒